

學術論文

陽明本源氏物語前編螢以後卷々について

―その本文の疵と物語世界―

田村俊介

富山大学人文科学研究第78号抜刷  
2023年3月

學術論文

陽明本源氏物語前編螢以後卷々について

―その本文の疵と物語世界―

田村俊介

## 第一章 オリジナルから近いか遠いかが本文の優劣を決める

新美哲彦氏は、『源氏物語の受容と生成』<sup>1</sup>第二部序説で、『平家物語』や説話、室町物語などを引き合いに出すまでもなく、<sup>オリジナル</sup>原典が最も価値を有するというわけでもない旨述べている。そして、オリジナルこそもっとも価値があり、オリジナルからの距離が本文の優劣を定めるといふ考えを相対化なさっている。物語の本文は一つでなければならぬ、という思い込みを外した試みとして、「伊井春樹、伊藤鉄矢、加藤昌嘉などの諸論」を挙げている。第二部序説注<sup>3</sup>である。注<sup>3</sup>では、加藤氏らの論文の論文名は「一切記されていないが、新美氏著書が二〇〇八年発行なので、二千一桁代の論文を私が挙げると、「源氏物語のさまさまの貌——文化でなく文献でなく——」<sup>2</sup>がある。加藤氏は、『源氏物語』研究が生氣も刺戟も失い、年毎に面白くなくなっている現在、この期に及んでなお、青表紙本源氏物語の優秀性を唱えるばかりで非大島本若しくは非青表紙本の異文に目を向けない研究者を疑問視、何故、それほど頑なに青表紙本系大島本を主として底本にしている活字校注書にしがみついているのか、確たる理由を聞かせて欲しい、と呼び掛けている。なるほど、『平家物語』の場合、語り本系一方流の本文（新全集や新大系の底本となっている覚一別本高野本など）が延慶本等非一方流本文よりも価値がある。しかし、第一に、室町中後期の物語『接待』は、群馬大学本が、慶応義塾図書館蔵A本（表題を「千手女の草子」と言う）よりも原典に近く、遙かに文学性が勝る。<sup>3</sup>第二に、『義経記』巻七も、明らかに、第一系列本（岩波大系の底本）が第二系列本（小学館新全集の底本。小学館全集も、真ん中の段の積文は、小学館新全集に同じ）よりも、原典に近く、文学的に勝っている。<sup>4</sup>第三に、「永享の乱」「結城合戦」を叙述する『鎌倉持氏記』は、『足利持氏滅亡記』よりも文学性が優る。<sup>5</sup>

こうした例がある以上、『源氏物語』についてオリジナルからの遠近⇨本文の優劣という図式が当てはまらないか当てはまるかは、『源氏物語』に即して考えてみなければならぬ。

私は、中世に異文を発生させた幾人かの知識人たちの文学的なセンスと、紫式部の文学的センスと、比較してみれば、後者のほうが上であるから、オリジナルから近いイコール本文が優れている、オリジナルから遠いイコール本文が劣っているという図式が成り立つと思う。もっとも、文学的センスについて、誰が上か、客観的に決めることなどできない、という向きもあるかもしれない。その場合、

現代の『源氏物語』研究者（ここでは、二十世紀終盤、二十一世紀序盤に『源氏物語』の論文、著書を公刊した人を指すことにしたい）一人一人の好みの問題になってしまふ。しかし、好みの問題にしても、紫式部の文学的センスが好みであり、中世の知識人たちの文学的センスは好みでない、と言つて言い過ぎであるが第二の好みであるような現代の研究者全員に対して、原典とは異なるさまざまな物語世界に目を向けるよう強制するのは問題ではなからうか。書写者が、この場面はこうあるべきだという意向に基づいて手を加えるということもあるかもしれない。その場合、その非青表紙本『源氏物語』は、『異本源氏物語A』、『異本源氏物語B』という新しい作品ということになる。その新しい作品の作者の文学的センスが好みでなく、紫式部の文学的センスが好みであるような研究者に対して、『異本源氏物語A』、『異本源氏物語B』に目を向けるよう強制するのは問題ではなからうか。少なくとも私は、オリジナルの再建に係なすような異本『源氏物語』、オリジナルと離れた異本『源氏物語』には、できる限り、目を向けたくないし、小学館全集や新全集、岩波新大系及び新潮集成だけでしか『源氏物語』を読まない研究者が存在しても、全く構わないと思う。例えば、光源氏が紫上を垣間見る場面の若紫巻の本文。青表紙本系大島本では、紫上やその周辺の人物の素性が分からないうちは、地の文で敬語が付かない。同巻の終わりのほうでは、紫上に、地の文でも敬語が使われるようになる。こうした敬語使用法について、中村一夫氏は、「大島本の本文は作中人物【ここでは、光源氏。田村注】の意識にそったものとなっており、主観的に追体験しやすいため臨場感のある表現になっている。他の伝本のように始めから敬語で待遇されていると、徐々に未知の人物の正体が解き明かされていくというおもしろみに欠ける表現となってしまう」と述べている。非青表紙本系の伝本に目を向けることを強制するということは、研究者から、そして読者から、徐々に未知の人物の正体が解き明かされていくというおもしろみを奪うことになるのではなからうか。私は、やはり、紫上を始めから敬語で待遇するような知識人の文学的センスよりも、作中人物の意識にそつて、臨場感のある表現をする知識人の文学的センスを好む。もっとも、新美氏の文章には、強制性は薄い。加藤氏の場合、「しがみつ」く（加藤氏論文にこのような言葉があった）、は私にとつて誉め言葉だから構わないが、「頑なに」（この言葉も、加藤氏論文にあった）は、揶揄の言葉である。その論文が生氣も刺戟も失っている、面白くない、という趣旨のことを加藤氏が述べていたとすれば、明らかに否定の言葉だから、こういう風に言われないうようになるために、小学館全集、岩波新大系、新潮集成以外にも目を向けよう、つまり、別本にも目を向けようと思つ方が現代の研究者の中

に出現してしまうだろう。その意味で、強制性が感じられる。

これに対して私は、二十世紀終盤、二十一世紀序盤の『源氏物語』研究が面白くなっているとは全く思わない。

佐藤陸氏は、「永享記遡源」<sup>7</sup>はバッハの『マタイ受難曲』にも生成批評にも触れていないため、短いものになっているが、きちんと『鎌倉持氏記』の上流（オリジナル）に遡る方向で進んでいる。加藤昌嘉氏は、

『源氏物語』の「上流（オリジナル）」に遡ることを目的とする意固地な研究は、抛棄する。下流への流れと揺れに目を留めてみると、現存するあまたの写本たち版本たちすべてを汲み上げることが可能になる。<sup>8</sup>

と述べているが、上流（オリジナル）に遡ることを目的とする研究を意固地と評することは佐藤氏に対して、失礼ではないか。私も、意固地と言われようと幼稚と言われようと、『源氏物語』前編の上流に遡ることをまず第一に考える。

青表紙本系諸本、河内本系諸本、別本のうち、河内本系諸本は、「義理」を通すことを旨とする解釈本文ないしは校訂本文」という通説<sup>9</sup>が定着しているため、ひとまず、研究対象から外したい。河内本本文とは、尾州家本古写の巻のなかの合成の巻について言えば、見セ消チ補入後本文のことである。

青表紙本系の本文と、別本の本文と、どちらが、原典に近いと思量されるか。

別本の中で最もすぐれているとされるのが、陽明本である。『源氏物語別本集成』第一巻で、陽明本が底本に取り上げられた経緯を示す序文が書き綴られた際、「現在の研究時点で最善と思われる本文」と評価されている。「現在」とは一九八八年九月のことである<sup>10</sup>が、その後、この「（別本の中で）最善」という評価を撤回する言説を見たことがない。陽明本は、古写の巻が三十四帖ある。墨流し文様の紙を、表の表紙にした巻が三十五帖あり、このうち、絵合は、「翻刻・解説篇」で、

絵合一帖は、甲類表表紙をもっているが、この表表紙は後から加えたもので、この一帖の本文の本来の表紙は、本文料紙の第一丁に外題を書いた仮表紙であったと思われる。その他の特徴は、甲類表紙の諸帖のそれとは違って、すべて紅葉賀などの諸帖のそれと一致する

と書かれている<sup>11</sup>。従って、「三十五」から「一」を引いた「三十四」帖が古写の巻、阿部秋生氏の言う甲類である。

第二章では、古写の卷々の中でも、螢以後御法迄を検討する。陽明本の引用は、注11に記した陽明叢書の影印篇により、大島本の引用は、岩波書店発行新日本古典文学大系（略称 新大系）に拠る。

幻巻については、別途、口頭発表若しくは活字発表する可能性がある。本拙稿では、紙幅の都合で、割愛する。

## 第二章 陽明本源氏物語螢以後巻々の本文の疵

### 第一節 螢巻

翻刻・解説編の「解説」に於いて、増田繁夫氏は、次のように述べている。

本帖には、次のように書写者の不注意による本文の脱落かと思われる箇所が、いくつか見られる。

① いかにそや宮は〔夜やふかし給ひしいたくもならし〕きこえしわつらはしきはひそひ給へる人そや（一〇オー1）

② はうたう経の中におほかれと〔いひもてゆけはひとつむねにありてほたいと〕ほんなうとのへた、りなんこの人のよきあしきはかりの事はかりける（一九ウー8）（一）の中は青表紙本の大島本）

これらは陽明文庫本独自の大きな脱落で、書写者が目移りにより一行あまりとばしたものである。もちろんこの脱落は、すでに陽明文庫本の書本の段階からあった可能性も考えられないわけではない。本帖では、見せけちやなぞり書きで、訂正している箇所もかなりあるので、一往書本と校合したかと思われるのであるが、不注意な書写態度と考えられるところが多々ある。

長文脱落は、更に以下のような例をも付け加えざるを得ない。

#### ● 大島本

女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、（新大系第二卷四三五頁三〜四行目）

陽明本

をんなはなにのあやめもしらぬことなれとえんなるさうそくつくして（一三オ・10ウ・1）

新大系第8段落、六条院の馬場で競射の日、この後、「打毬楽」陽明本では「ちきう」であるが、これは陽明本の誤読・誤写であろう）や「落蹲」の演奏が行われるのだから、貴人が着飾るのは当たり前、舍人でさえ着飾っている、というのが作者の言いたいことだったのであろう。

●大島本

世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを（同四三九頁五行目）

陽明本

世にふる人のみるにもあかすきくにもあまることを（一八ウ・9ウ・11）

以上四箇所に加えて、次の異同箇所も、やはり、陽明本側のミスによって生じた長文誤脱の箇所であると私は思う。

●大島本

【光源氏は、花散里が】ふと見知りたまひにけり（一目で見抜いておしまいになった——新大系脚注）とおぼせど、ほ、笑みて、なをあるを（この日参集した）他の人々を。——新大系脚注、よしともあしともかけ給はず。（新大系第二卷四三六頁二～三行目）

陽明本

ふとみしり給にけりとおぼせとは、ゑみてなほある御けしきをもかけ給はず（一四ウ・4ウ・6）

については、第一段階として、陽明本書写者は「よしともあしと」のような文言をついうっかり、誤脱してしまう、第二段階として、「なほあるを」と「もかけ給はず」とがつながらないから、「を」を「御」と表記した上で、「けしき」を挿入したのではなからうか。この推測が当たっていれば、「を」を「御」に表記するのは改竄行為とは言えないが、「けしき」の挿入は改竄行為である。

では、もう少し異同が少ない字数となる異同箇所について、陽明本本文が非古態性を持つと思われる箇所を列挙して行きたい。

①大島本

人ざまのわららかにけ近くものしたまへば、いたくまめたち、心し給へど、猶をかしく愛敬づきたるけはひのみ見え給へり（新

大系第二卷四二七頁一～三行目)

陽明本

人さまのわかやかにけちかくものし給へはいたうまめたちこゝろし給へと猶をかしくあいきやうつきたるけはひのみえ給へは  
(2オ・10ウ・3)

「人さまのわららかにけ近くものしたまへば」、若しくは、「人さまのわかやかにけちかくものし給へは」は、「猶をかしく愛敬あいぎやうつみきたるけはひのみ見え給」ふ、若しくは、「……の見え給」ふ、に続く。玉鬘の元からの性格について、真木柱巻冒頭近くに、

○大島本

女は、わら、かににぎは、しくもてなし給本上(新大系第三卷一一二頁一三行目)

陽明本

女はわら、かに、きわ、しくもてないたまふほん上(4オ・7ウ・8)

という記事があるから、大島本の「わららかに」という本文のほうが古態性を持つだろう。陽明本書写者は形容動詞「わららかなり」が耳慣れないため、文脈に合うかどうか、評される作中人物に合うかどうかを顧みず形容動詞「わかやかなり」に改竄してしまったのではなからうか。

②大島本

【蜜宮の詞】「すこしけよ近きほどをだにゆるし給はば、思ふ事をも片かたはしは晴るけてしかな」(同四二七頁五～六行目)

陽明本

すこしけちかきほどをたにゆるし給は、おもふことかたへをもはるけてむかし(二ウ・6ウ・8)

「片はし」は、積もり積もった思いの一端を話したい、というときに、よく使われる。その一端のことを「片はし」と言うようである。以下、大島本で用例を挙げた後、陽明本の本文も併記する。しかし、陽明本が古写の巻(阿部秋生氏が言う甲類の巻)でない場合、『源氏物語大成』校異篇で調べた結果を記すという方針を取る。

○大島本

さまざまに思給へ集めしかな。いかで片はしをだに（朝顔卷。新大系第二卷二五六頁二行目。同校注書は「ぜび、せめて一端なりと（申し上げたい）」と施注する）

陽明本

さまざまにおもひ給しつめしかないかてかたはしをたに（六オ・1〜3）

○大島本

思ふことを、まほならずとも、片はしにてもうちかすめつべきをんな親もおはせず、（藤袴卷。同第三卷九一頁四〜五行目）（『源氏物語大成 校異篇』に拠れば、「片はし」について異文なし）

○大島本

【柏木の詞】「……たゞか許思ひつめたる片はし聞こえ知らせて、（若菜下卷。同三六四頁四行目）  
（『源氏物語大成 校異篇』に拠れば、「片はし」について異文なし。別本の阿里莫本も、「……ただ片はしをかばかり聞こえ」で「片はし」という本文を持つ）

○大島本

【薫の詞】「月ごろの積もりもそこはかとなけれど、いぶせく思たまへらるるを、片はしもあきらめきこえさせて、慰め侍らばや。……」（早蕨卷。同第五卷一一頁三〜四行目）

陽明本

月ごろのつもりもそこはかとなれといふせく思給へらるゝをかたはしもあきらめきこえさせてなくさめはへらはや（九ウ・

11〜10オ・3）

陽明本書写者は、このような「片はし」の用法を知らずに、「かたへ」と変えてしまったのであろう。

吉岡曠氏は、「桐壺卷異文考証」<sup>12</sup>の中で、

11 くれまとふ心のやみもたえかたき(ナシ) かたはしをたに(かたへ) はるく許に(なんいと) きこえまほしう侍を  
(二三・14)

を取りあげ、青表紙本系池田本／河内本系尾州家本の対立について考証している。パーレン括弧内が河内本系尾州家本である。ちなみに、青表紙本系大島本も、

●大島本

くれまどふ心の闇も耐へがたき片端をだに晴るくばかりに聞こえまほしう侍を、(新大系第一卷一三頁六～七行目)  
と、池田本と同文であり、陽明本は、

くれまとふ心のやみもすこしはるくはかりなんきこえさせまほしう侍を(一三オ・7～8)  
と、河内本系尾州家本と近い。

この河内本の持つ「かたへ」の意味・用法について、大部分は人間や車といった、数に換算可能なものであること、思い、気持の一端という例は一例もないことを述べ、いっぽうの「かたはし」は、思い、気持の一端の意が一〇例という調査結果報告をなさっている。結論として、桐壺巻の新大系一三頁に相当する河内本の「かたへ」は、中古語としては誤用だと述べている。

陽明本螢巻の「かたへをもはるけてむ」の「かたへ」も、中古語として誤用と言ってよいだろう。

④大島本

ほと、ぎすなど必すうち鳴きけむかし、うるさければこそ聞きもとめね。(同四三二頁八行目)

陽明本

ほと、ぎすなどかならずうちなきけんかしうるさければこそき、もとかめね(八オ・11～ウ・2)

新大系は、「鳴きけむかし」の推測から、語り手の省筆の弁に転ずる。男が思いを遂げずに女のもとを立ち去る常套的な場面ゆえに、詳述を避ける」と施注する。このような場面で、ほととぎすが鳴いた、と書くのは常套的で陳腐である。だから、語り手は、ほととぎすの声に耳を傾けなかった。そのような文脈で、「聞き咎む」(聞いて、何かに気付く)は適切であろうか。

⑤大島本

帥すしの親王みこよくものしたまふめれど、(同四三六頁一行目)

陽明本

輔のみこよくものし給めれと(一四ウ・2)

「帥」と「輔」の対立については、増田繁夫氏が『翻刻・解説篇』で述べている通り、「輔」が誤読・誤写であろう。

⑥大島本

明け暮あれ書かき読よみいとなみおはず。つきなからぬ若人わかあまたあり。(同四三七頁九～一〇行目)

陽明本

あけくれかきよみいとなみおはずへきみながらぬわかき人あまたあり(一六ウ・4～5)

陽明本書写者は、第一段階として、「つ」を「へ」に誤写してしまったのであろう。「つ」と「へ」とは、字形の類似から間違えられることが多いから、これだけならまだ良かった。しかし、第二段階として、「へきなからぬわかき人」では意味が通じないから、上との続きで、「……べき身」となるようにしてしまったのではなからうか。

⑦⑧大島本

またいとあるまじき事かなと見るく、おどろくしくとりなしけるが目おどろきて、静しづかにまた聞きくたびぞ、にくけれどふとおかしきふしあらはなるなどもあるべし。このごろおさなき人の、女房ごうなどに時く読よまするを立ち聞きけば、……(同四三八頁九～一二行目)

陽明本

またいとあるまじきことかなとみるくをとろかしくとりなしけるかめをとろきてしつかにきくたひそにくけれどふとをかしきふしあらはなるなどあるへしこの心をさなき人の女房などときく読よまするをたちきけは(一七ウ・10～一八オ・5)

陽明本書写者は、二字繰り返し返しの踊り字、一字繰り返し返しの踊り字の読み取りが苦手なようである。苦手であるために、かえって、もと

もと踊り字が無いところに勝手に踊り字を加えてしまうこともあったようだ。ここでは、「おとろくしく」のような原形の踊り字の読み取りに失敗し、「おとろかしく」（濁点をつけると「おどろかしく」）のような語が出現した。また、「このごろ」のような原形、濁点を抜くと、「このころ」のような原形に、勝手に一字繰り返しの踊り字を加えてしまったようである。陽明本のような「この心をさなき人……」という本文が原型で、この「心」という一字を見て「こゝろ」という三字を連想し、その踊り字が衍字だと判断、これを削除してできたのが、大島本の「このごろをさなき人……」である（「を」と「お」、仮名遣いの違い、清濁は、ここでは、注目しない）と主張する方は居るだろうか。

#### ⑨大島本

……むかしの父おとゞたちの御仲らひに似たり。

内のおとゞは、御子ども腹ぐいと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人がらに従ひつゝ、心にまかせたるやうなるおほえ御勢ひにて、みななし立て給ふ。（同四四三頁一五行目～四四四頁四行目）

#### 陽明本

むかしのちゝをと、たちの御なからひに、たりをと、は御ことゝもはらくにいとおほかるにそのおひいてたるおほえ人からにしたかひつゝ、心にまかせたるやうなるおほえいきほひにてみな、したてたまふ（二五ウ・5～10）

陽明本の「御ことゝも」は誤写・誤脱に拠って生じた本文で、親本は「御ことも」、若しくは、「御こともゝ」であったと思われる。「むかしの父おとゞたちの御仲らひ」とは、光源氏と頭中将の、若い頃の関係性である。だからこそ、大島本は、「御子ども腹ぐいと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人がらに従ひつゝ、心にまかせたるやうなるおほえ御勢ひにて、みななし立て給ふ」のが頭中将だと特定する必要があり、「内のおとゞは」と述べているのである。頭中将は、螢巻では、内大臣に昇進していた。そこへ行くと、陽明本の「をと、は」は致命的な欠陥を持つ本文である。

以上、①から⑨迄、大島本と比較して非古態性を持つ本文を挙げてきたが、この他にも、非古態性を持つとおぼしき本文はある。

第二節 盛夏から秋迄の巻々

常夏巻について、増田繁夫氏は、

●大島本

(光源氏)「撫子」なでしこ「玉鬘の異名。新大系第三卷七頁の注」を飽かでもこの人たの立ち去りぬるかな。いかでおととにもこの花園その見せたてまつらむ【父内大臣に玉鬘を引き合わせたい、の意をこめる。新大系注】。世もいと常なきを【命がいつまでであると  
も知れぬ無常の世だから、の意。新大系注】と思ふに、……(新大系第三卷七頁五〜七行目)

陽明本

なてしこをあかてもこの人たのたちさりぬるかないかてこのおととにもいとつねなきおと思に(二〇ウ・4〜7)

の異同について、「陽明文庫本あるいはその粗本が一行分書写し落したものであろう」と述べておられる。大島本だと、光源氏が、自分もいつ死ぬかわからないから、早めに、頭中将に、玉鬘のことを知らせたい、と思ったことになる。陽明本だと、このままでは、頭中将に、人間はいつ死ぬか分らないと知らせてあげたい、という意味になるのではなからうか。明らかに、大島本のほうが古態性を  
持っている。

異なる文字数が少数である異同箇所については、まず、

①大島本

【玉鬘が】うち傾かたむき給へるさま、火影ほかげにいとつづくしげなり。(同一二頁二行目)

陽明本

うちかたはらふしたまえるさまいとうつくしけなり(一〇オ・10〜11)

が気にかかる。増田氏も「陽明文庫本だと、玉鬘が光源氏のそばに寄って臥したことになる、この二人の関係がより複雑になる」と重大視している。玉鬘は光源氏に警戒心を抱いており、この後もその気持ちに大きな変化はないから、陽明本はあり得ない本文であろう。

②大島本

身にしむ風も吹き添ふかし（同一二頁三行目）

陽明本

身にそふかせもふきそふかし（一〇ウ・1〜2）

「身にしむ風」のような言い方は、他の巻にある。

○尾州家本見せ消チ補入前本文

山里の松のかけにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき（宿木〔二三〕一〇行目<sup>13</sup>）

陽明本

山さとのまつのかげにもかくはかり身にしむ秋のかせはなかりき（四一ウ・2から3行目）

「身にそふ風」やそれに近い表現は、他の巻にない。

③④大島本

【五節の君は】「御返しや、く」と、筒をひねりて、とみに打ち出でず。（同一八頁二二行目）

陽明本

御返しや、とこふをひねりて（二〇オ・11〜ウ・1）

「筒」は「双六の賽を入れて振り出す筒（つつ）」である（新大系注）。「こふをひねりて」は意味不明で、「筒をひねりて」のほうがよいだろう（陽明本書写者は踊り字を「こ」に変えてしまったか）。その前に、陽明本は、二字繰り返しの踊り字を一字繰り返しの踊り字に誤写・誤読したらしい。第一節でも触れた通り、陽明本書写者や陽明本の親本の書写者は、一字繰り返しの踊り字と二字繰り返しの踊り字の読み取りが両方とも苦手である。

⑤大島本

たゝかのあへものにしけん法の師だにとをくは（同一二頁三〜四行目）

陽明本

た、かのあえものにしけんのりしたにとおほくは(二三ウ・4〜5行目)

大島本だと、頭中将が、近江君が早口でなくなればいいのだが、の意を、婉曲に言った、ということである(新大系注)。陽明本は、親本が「とおく」であったので、仮名遣いを正すつもりで「お」の傍らに「ほ」と書き込んだ、その傍書が本行に紛れ込んだのであろう。

⑥大島本

五節、「あまりことくしくはづかしげにぞおはする。よろしき親おやの、思ひかしづかむにぞ、尋ね出いでられまし」(同二二頁一〜一三行目)

陽明本

五えうあまりことくしくはづかしげにそをはすめるよろしきおやの思かしづかんにそたつねいてられ給まし(二四オ・8〜11行目)

「五節」とは、近江君の双六の相手をしている「五節の君」である。「五えう」は明らかに、非古態性を持つ本文である。

⑦大島本

点てんがちにて(同二三頁四行目)

陽明本

さうかちにて(二六オ・5〜6行目)

「点てんがち」とは近江君の手紙を述べた言葉で、「点の目立つ、ごつごつした筆使い」である(新大系)。陽明本に漢字を宛てれば「草がち」であろうが、女性の手紙一般が「草がち」であるはずで、やや特異な風であることが推測される近江君の書風の形容として、考えにくい。

篝火巻については、増田氏が述べている通り、陽明本が劣っている異同箇所が幾つかある。

野分巻については、長文誤脱として、

●大島本

け近きかたはらいたさに、立ち退きてさぶらひ給ふ。(新大系第三卷四二頁九〜一〇行目)

陽明本

けちかきか、たわらいたさにたちのき給(八オ・111ウ・1)

の異同箇所を挙げることができる。まず、「け近き」の下に助詞の「が」があるかどうかの異同については、判断を保留したい。「が」を持つ陽明本のほうが古態性を持つのか、「が」を持たない大島本のほうが古態性を持つのか、現在の私には分からない。しかし、「てさぶらひ」については、大島本やその親本が後から付け加えたのか、陽明本やその親本が誤脱したのか。陽明本が誤脱したのだと思う。増田氏が「青表紙本などが、夕霧の動作の描写がより具体的である点がすぐれているといえる」と述べている通りである。また、次に挙げる㊦も陽明本側が非古態性を持つこと疑いない。

㊦大島本

こ、らの齡に、まだかくさはがしき野分にこそあはざりつれ(新大系第三卷四〇頁一〜二行目)

陽明本

こ、らのよはひにまたかくさはがしきのあきにこそあはざりつれ(五ウ・112)

夕霧の祖母である大宮の詞である。元は「のわき」であったのを、陽明本書写者が「のあき」と誤写・誤読したのである。「わ」と「あ」というたった一字の違いとは言え、陽明本の非古態性を示す根拠の一つになるだろう。陽明本書写者は、「わ」の読み取りが苦手であると推測される。

野分巻の書写者は、表表紙の巻名を見ていたか分からないが、野分巻を書写しているつもりで野分巻を書写していたと思われる。また、「何年もの間、これほどの台風に遭ったことがない」と言っているのだという流れが分かっていたはずなのに、その台風の意の「のわき」を誤写するとはどういうことなのだろうか。よほど、陽明本書写者が「わ」の読み取りが苦手であったのか。よほど、親本の「わ」が「あ」に似た字であったのか。

### 第三節 先行研究が充実している巻々

行幸、真木柱については、吉岡曠氏が、翻刻・解説篇で、巻全体の非古態性を明らかにしているので、省略に従う。

藤裏葉については、工藤重矩氏が、「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界」<sup>14</sup>で、非古態性を明らかにしている。論のメインテーマは、国冬本の非古態性であるが、国冬本が非古態性を持っているだけでなく、陽明本も持っている箇所が幾つかある。

● ひ三位（大島本は、「非参議」）

● 賀皇見（大島本は、「賀皇恩」）

● へそんつ△さ（△は虫損。大島本は「ふんのつかさ」

などである。従って、藤裏葉についても、省略に従う。

### 第四節 尾州家本の合成の巻が存在する巻々

私は、尾州家本古写の巻の中で、合成の巻と認定される、宇治十帖中「椎本」・「早蕨」を除く八つの巻々、加えて、正編の「鈴虫」・「御法」、以上のような正統編合わせて十の巻々については、その見せ消し補入前本文を、校注書の底本にすべきだと考えている。<sup>15</sup>

このうち、総角、宿木の二巻についてのみ、雑誌掲載の形ながら、また、全文訳を付さない形ながら、校注書を作成しようと思いついた。二〇一三年二月から実行に移った。<sup>16</sup>そして、二〇二一年秋に完結した<sup>17</sup>。他の八巻についても、私はまだ、青表紙本系大島本に勝る本文を発見していないが、尾州家本見せ消し補入前本文（尾前と略すことがある）を、底本にしようと考えている。本拙稿本章本節では、尾前と陽明本との優劣を考察したい。

まず、鈴虫についてである。

長文誤脱の例は、

●尾州家本

心にまかせて・人きかぬ・おくやま・はるけきの、まつはらに・こゑをしまぬも・いとへたて心あるむしになむありける・す、  
むしは(いと)心やすく・いまめいたるこそ・らうたけれ(七オ・10行目↪ウ2行目)

釈文に直した尾前

心にまかせて、人間かぬ奥山、遙けき野の松原に声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になんありける。鈴虫は心やすくいまめいたるこそらうたけれ。

陽明本

心にまかせて人きかぬをく山はるけきの、松はらになんありける(九オ・9↪11)

この箇所については、伊井春樹氏も、翻刻・解説篇で、陽明本側の長文誤脱であることを認めている。

続いて、一字から数文字が対立する箇所に移ろう。

①尾州家本

ひとりともあまたしてけふたきまであふきちらせは・さしよりたまひてそらにたくはいつくのけふりそとおもひわかれむこそよ  
けれ……(二ウ・7↪9行目)

釈文に直した尾前

火取どもあまたしてけふたきまであふぎ散らせば、さし寄り給ひて、(光源氏)「空に焚くは**けふり**の煙ぞと思ひ分かれぬこそ良  
けれ。…」

陽明本

ひと、もあまたしてけふたきまであふきちらせはさしよりたまひてそらにたくはいつくのけふりとおもひわかれぬこそよけれ  
(三オ・10↪ウ・3)

尾前の「火取」が、陽明本では、「人ども」となっている。「火取」(火取香炉)がたくさんであったから、「こんなに匂いが強くなるま

で焚かなくてもいいのに」という光源氏の苦言が導き出されることになった。「火取」は必要不可欠である。陽明本の親本が「り」を誤脱したのであろう。そして、名詞「人」も接尾語「ども」も、また、「人」と「ども」が接続した文節も、見慣れていたため、陽明本書写者、陽明本書写監督者、陽明本親本の書写者が、誤りに気付かなかったのであろう。

②尾州家本

ゆふくれに・わたりたまひつ、(六オ・7～8行目)

積文に直した尾前

夕暮れに渡り給ひつ、

陽明本

ゆふくれく／＼にわたりたまへは(七ウ・10)

「くれ」の下の踊り字は、陽明本側の誤りであろう。

③尾州家本

人めにこそ・かはることなく・もてなしたまひしか・うちには・うきをしりたまふけしきしるく(六オ・11行目～ウ・二行目)

積文に直した尾前

人目にこそ変はることなくもてなし給ひしか、うちには憂きを知り給ふ気色しるく

陽明本

人めこそかはる事なくもてなしきこえ給しかうへにはうきをしり給御けしきしるう(八オ・4～6)

尾前では、光源氏の女三宮待遇が「人目」と「うち」とで正反対であることを述べている。陽明本の「うへには」は、漢字に直すと「上には」と直さざるを得ず、これを現代語訳すると「表面的には」と訳さざるを得ない。それでは、「人目には」と同じことになってしまうのではないか。

④尾州家本

月かけはおなし雲みに見えなからわかやとからのあ【あ】が見せ消ちされて、「と」が補入されている【きそかはれる(九

ウ・9（10）

積文に直した尾前

月影はおなじ雲居に見えながらわが宿からの秋ぞ変はれる

陽明本

月かけはをなしくもぬにみえなからわかやとからのときそかはれる（二二オ・8（9））

この箇所、たまたま、尾前の積文が、大島本を積文に直した新大系上段の積文と同じなので、新大系下段の注を引用する。「源氏の歌。月影（＝冷泉院）は変わることなく雲の上に姿を見せているのに、私の宿から見ると秋は大きな変わりようです。身の経てきた変化を率直に述べた。」賛成したい。だとすれば、この和歌の下の句は、『伊勢物語』第四段を踏まえているのであろう。

……。又の年の正月に、梅の花ざかりに、こぞ去年を恋ひていきで、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷いたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞ去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

（引用は、新潮日本古典集成『伊勢物語』に拠る）

この和歌の上の句について、工藤重矩氏は、

年の内に春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とや言はむ（1）

（略）

春はやとき花はや遅きと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもある哉（10）

など「（～）や～、（～）や～」の和歌十首近くを挙げ、「～か、それとも～か」という二者択一の言い方であるとしている。その上で、業平は去年と違って見える原因を一応三つ、我身、月、春を考えて、その中から「我身」を除外し、残る「月」や「春」の二つで

扱一の形で表現したということになる。「我身ひとつは」は上句の「月」「春」に直接対置されていると見るべきであろう。と述べている。<sup>18</sup>

女が去ったため、周囲の自然の春の光景が変わったように見える。

光源氏も、結婚していた時は寵愛が薄かった女三宮に今更ながらの未練を感じている、その女三宮が半分自分の元を去っている状態のため、周囲の秋の光景が変わっているように見える、「立ちて見、居て見、見れど、」去年の秋や一昨年の秋と同じ風景に見えないと訴えたかったのではないか。だとすれば、「時ぞ変はれる」でも、悪くはないが、やや、主張に鮮明さが欠けるように思う。

〔5〕尾州家本

ことなる事なかめれと・(九丁ウ・10行目)

釈文に直した尾前

ことなることなかめれど

陽明本

ことなる事なかめれと(二二オ・9～10)

これについては、伊井氏も、陽明本側の誤脱であることを認めている。

〔6〕尾州家本

かたみに御らんせさ【「さ」に見せ消す】られたまひ・(一〇丁ウ・1行目)

釈文に直した尾前

かたみに御覧せさられ給ひ

陽明本

かみに御覧せられ給(一三オ・2)

これについては、伊井氏も、「た」が陽明本側の誤脱であることを認めている。但し、尾前側も、「さ」が不注意に拠る衍字であろう。

⑦尾州家本

すくるよはひにそへて・(二一丁オ・2行目)

釈文に直した尾前

過ぐる齡に添へて

陽明本

すくるよはひにすへて(二三ウ・5)

「添<sup>そ</sup>」ふ、と言う動詞を、「す」ふ、とするのは、誤読・誤写であろう。

⑧尾州家本

世中なへてはかなく・いとひすてまほしきこと(二三ウ・7～8行目)

釈文に直した尾前

世の中、なべてはかなく、いとひ捨てまほしきこと

陽明本

よになへてはかなくいとひすて、まほしき事(一七オ・1～2)

この異同箇所については、②の異同箇所と共に、伊井氏が、陽明本側の誤りであることを認めている。この異同箇所と②の異同箇所と共に、陽明本書写者、若しくは、陽明本の親本の書写者が踊り字の有無の判断が苦手であった証拠になる。

⑨尾州家本

春宮の女御の御ありさまのならひなく・いつきたてたまへる・かひくしさも・大将の又いと人にことなる御さまも・いつれと

なくめやすしとおほす(二四丁オ・1～4行目)

釈文に直した尾前

春宮の女御の御有様の並びなく、いつきたて給へるかひくしさも、大将のまたいと人にことなる御様をも、いつれとなくめや

すしとおぼす

陽明本

東宮の女御の御ありさまのならひなくいつきたてまつりたまへるかろく㊦くも大将の又いと人にことなる御さまをもいつれとなくめやすしとおぼす（二七オ・7～11）

大島本を底本とした新大系上段の釈文も、「御ありさま」の下の「の」の有無を除いて、尾前と同文なので、新大系下段の中も引用すると、「春宮の女御の御有様」に「明石女御のおありさまは」、「かひくしき」に「かいがあつて今に榮えているさま」と施注されている。この「かひくしき」と対立する、陽明本の「かろくしくも」の「ろ」について、或いは陽明本の「かろくしも」（翻刻・解説篇では、このように翻字されていた。このような翻字のほうが正しいのかもしれない）の「ろ」について、伊井氏も、誤読・誤写であることを、認めている。

御法については、

●尾州家本

うせ給にけるかな・をくれさきたつほとなきよなりけりやなとしめやかなるゆふくれになかめ給・（二七オ・5～7行目）

釈文に直した尾前

「……。亡せ給ひにけるかな。遅れ先立つ程なき世なりけりや」などしめやかなる夕暮れにながめ給ふ。

陽明本

うせ給ぬるかなとゆふくれになかめ給（20ウ2～3）

は、明らかに、陽明本側の長文誤脱であろう。

以下、一字、或いは数字程度の異同箇所、陽明本の非古態性を示す本文を挙げて行こう。

①尾州家本

おなしやまなりとも・みねをへたて、・あひみたてまつらぬすみかにかけはなれなむことをのみおほしまうけたる（二オ・4～

6行目)

釈文に直した尾前

同じ山なりとも峰を隔てて、あひ見たてまつらぬ住みかかけ離れなむことをのみ思し設けたる

陽明本

おなし山なりともみねをへたてあひみたて□つらすみしかきかけはなれさらんことをのみおほしまうけたる(二ウ・1〜4)  
陽明本側が「ぬ」を誤脱、「し」を故意かミスによって挿入してしまい、「に・き」の誤読・誤写もあったのだろう。

②尾州家本

七そうのほうふくなとしなく給はず(二ウ・8〜9行目)

釈文に直した尾前

七僧の法服など、品々たまはず

陽明本

僧そうのほうふくなとしなく給はず(三オ・9〜10)

「七僧の法服」の「七僧」は、「大法会の僧たち。講師、読師(どくし)、呪願師(じゅがんし)、三礼師(さんらいし)、唄師(ばいし)、散華(さんげし)、堂達(どうたつ)。「七僧」の用例は鈴虫巻にもある。ここでは、鈴虫巻の注(新大系第四卷七三頁注)を抄出した)。陽明本側が、このような、言わば仏教の世界の専門用語を知らなかったため、「七」を削除し、耳慣れた「僧」という言葉に変えてしまったのではないか。或いは、専門用語を知らなかったために、「僧」だけあって「七」のような字がなかったことを不審に思わなかったのではなからうか。

③尾州家本

としころつかうまつりなれたる人／＼のことなるよるへなく・いとをしけなる(四ウ・5〜6行目)

釈文に直した尾前

年頃仕うまつり馴れたる人／＼の、ことなる寄るべなういとほしげなる、

陽明本

としころつかうまつりなれたる人／＼のことなとよりところなくいとをしげなる（九オ・9～11）

「寄るべ／＼寄りどころ」の対立は、伝本の古態性／非古態性を判断する材料の一つに加えない。「ことなと」は、「ことなる」の誤読・誤写で生じた異文ではなからうか。

④尾州家本

身にしむはかりおほさるへきあきかせならねと・つゆけきおりかちにてすくし給（八ウ・6～8行目）

釈文に直した尾前

身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けき折がちにて過ぐし給ふ。

陽明本

みにしむはかりおほしめさるへきかせなれとつゆけきをりかちにてすくし給（一〇ウ・5～7）

「身にしむ風」に当たると、その人は悲しい気持ちになる、ということは、宿木巻の、

○釈文に直した尾前

松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのだかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさも

おほえず、……。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき（宿木（二三）八～一〇行目）

陽明本

……

山さとのまつのかげにもかくはかり身にしむ秋のかせはなかりき（四一ウ・2～3行目）

から分かる。「身にしむばかり思さるべき秋風」でない、ということが、涙を流しがちであるという意味も含む「露けき」と逆接の関

係でつながる。陽明本本文のように、「身にしむばかり思さるべき秋風」であるという内容である（陽明本は「思し召さる」であるが、「思さる」か「思し召さる」かは、今は、違いが無いと考えて置く）とすると、それがどうして、「露けき」と逆接なのか、分からない。少し涼しくなった時節柄も、「身にしむばかり思さるべき（或いは、思し召さるべき）秋風」である、というのはおかしい。

⑤尾州家本

一日一夜にても・いむ事のしるしこそはむなしからす侍なれ・（一ウ・9～10行目）  
釈文に直した尾前

（光源氏）「……一日一夜にても、忌むことのしるしこそはむなしからす侍なれ……」

陽明本

一日一やあむことのしるしこそはむなしくはへるなる（一四ウ・3～4）

尾前の本文に従えば、一日出家の功德を言った、光源氏の詞である。吉沢義則氏は、夢浮橋卷の「一日の出家の功德は量りなきものなれば、なほ頼ませ給へ」について、

「……一日出家といふ建前で出家するといふ事にしませう。一日出家は心地観經に『若善男子善女子、發阿耨多羅三藐三菩提心、一日一夜出家修道、二百萬劫不墮惡趣』とあるやうに功德無量のものだから、一日出家でもなほ佛の功德を信じなさい」と説いた文章である。

と述べている<sup>19</sup>。尾前のような本文が原典に近いことは疑いない。残るは、陽明本の、一日出家の功德が「むなし」い、という本文が、ついつい通りの誤読・誤写に拠って生じたのか、改竄に拠って生じたのか。「からす」を「く」に変化させたのは、物理的な理由とは考えづらいから、改竄であろう。

〔6〕尾州家本

かきりありける事なれば・からをみつ、もえすこし給まじかりけるぞ・心うき世中なりける・（二四オ・1～3行目）  
 積文に直した尾前

限りありけることなれば、骸を見つともえ過こし給ふまじかるぞ心憂き世の中なりける。

陽明本

かきりあることなればかくてもひかすをたにすこし給まじかりけるそ心うき（一七オ・5～7）

原典は「からをみつ、も」のような本文であつて、陽明本書写者は、本歌

空蟬は殻を見つともなぐさめつ深草の山煙だに立て

（新全集『古今和歌集』<sup>20</sup>。八三一番）

を知らないせいもあるのだろうか、「かくても」と誤読・誤写してしまった。「らをみつ、」から「くて」への変化である。「かくてもすこし給まじかりける」、積文に直せば、「かくても、過こし給ふまじかりつる」では、前後とつながらないから、「ひかすをたに」、積文に直せば、「日数をだに」を補入したのではなからうか。第一に誤写、第二に改竄、というパターンの改竄の一例である。

〔7〕尾州家本

かせの【の】が見セ消チされて、「野」が補入されている。これは、改竄というより、振り漢字という行為である【わきたちてふくゆふくれ（一五オ・5～6行目）

積文に直した尾前

風、野分だちて吹く

夕暮

陽明本

かせの秋たちてふくゆふくれ（一八ウ・1～2行目）

第一帖桐壺から第四帖迄の陽明本について、阿部秋生氏は、「陽明文庫本の本文は、青表紙本・河内本の本文をどのようにとりあわ

せても出て来ないものである」と述べ、また、第三帖空蟬巻の陽明本について、「陽明文庫本は、青表紙本・河内本以前の本文と考える可能性があるかもしれない」と述べている。

確かに、「かせの秋たちてふくゆふくれ」は、青表紙本と河内本をとりあわせて出て来たものではない（とりあわせ、は第五帖若紫巻の陽明本に顕著に見られるようである）。ここでは、青表紙本系大島本は、尾前と同文だから、とりあわせ、という現象は想定しよ「うがない。しかし、尾前やそれと似た本文の伝本か、大島本と似た本文の伝本か、それは分からないが、「かせのわきたちてふくゆふくれ」のような本文を持つ伝本が、陽明本の親本の親本であったと推定される。陽明本の親本の書写者は、「わ」の読み取りが苦手であるため、「かせのわき……」を「かせのあき……」に変化させてしまった。陽明本書写者が、これに漢字を当てた。『古今和歌集』秋歌上巻頭歌に、

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

（新全集『古今和歌集』。一六九番）

があるから、「風が、秋が来たと思わせるような吹き方で吹いた夕暮」ということで、一応、意味は通じる。しかし、当該段落は、秋の半ばに逝去した紫上を偲ぶ場面である。陽明本の親本の書写監督者は、そうしたところにまで頭が回らなかったであろう。

反対に、陽明本のような本文から尾前や青表紙本系大島本のような本文が生まれたという推定をすることは可能であろうか。「秋」という一字からひらがな二字「あき」を連想、その「あ」がかつては「わ」だと想像した人間がいたとすれば、その想像に基づいて、「あ」を「わ」に書き替える、即ち、「かせのわきたちて……」のような本文を捏造した可能性も考えられる。しかし、そのような想像をし得た人間が居たとは考えられない。「かせのわきたちてふくゆふくれ」は捏造された本文ではない。夏に逝去した桐壺更衣を偲ぶ段落も、

○大島本

野分立ちてにはかに肌寒き夕暮（新大系第一巻一〇頁一三行目。桐壺巻）

陽明本

野わきしてにはかにはたさむきゆふくれ（一〇オ・2〜3）

であるから、少なくとも「のわき」の三字については、この通りが原型であると断言できる。

これを機に、別本が、尾前よりも前の時代（と言うのは、青表紙本成立よりも前の時代、と言うのと、実際にはほぼ同じである）の本文の姿を残しているという言い伝えを、大いに疑ってみることにしても、罰は当たらない。阿部氏も空蟬卷の陽明本について、右記のような発言をなさった後に、「ただし、これをいうには、全体を検討してみることが必要だろう」と、文字通り但し書きを付けている。

⑧尾州家本

あみた佛くくとひき給す、にまきはしてそ・（一五オ・11行目）

積文に直した尾前

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」と引き給ふ数珠に紛らはして、

陽明本

あみた仏にひき給す、のかすにまきはして（一八ウ・8〜9）

新大系は「阿弥陀仏く」について、「仏を連呼する。僧侶の声に合わせる」と注する。陽明本本文では、「連呼」にならない。陽明本書写者は、二字繰り返し返しの踊り字の読み取りも苦手だから、「あみた仏とひき給す、のかすにまきはして」としてしまったのではなからうか。その後、そのままでは通じないので、「と」を「に」に変えるという改竄行為を犯してしまったのである。但し、一字の変化は、物理的理由による誤読・誤写である可能性もあること、「阿弥陀仏に引き給ふ数珠の数に紛らはして」なら通じると判断したかどうか分らないから、改竄の例として挙げるのは、保留して置きたい。いずれにせよ、非古態性がある本文であることは間違いない。

⑨尾州家本

さたまりたる念仏をはさるものにて・ほく多經【經】が見セ消チされて、その右横に、小さな字で「せんほう」と傍記【なとす】【す】が見セ消チされて、「を」が補入されている【せさせ給・（一五ウ・5〜6行目）。「す」と「せ」は連綿しているが、その右側に「を」と傍記】

積文に直した尾前

定まりたる念仏をばさるものにて、法華経など誦せさせ給ふ、

陽明本

さたまりたる念仏をはさる物にて御と経なとせさせ給（一九オ・2～3）

陽明本は、「ほくゑ経」のような本文を「御と経」と誤読・誤写してしまった。この本文では、「定まりたる念仏をばさるものにて、」とのつながりが悪い。

なお、新大系は、「法花経」について、「妙法蓮華経は女人成仏を説くので、紫上追善に誦する。」と注する。妙法蓮華経を意味する固有名詞が消滅する陽明本は残念な伝本である。

⑩尾州家本

ちしのおと、あはれをもおりすくしたまはぬ御心にて（二六ウ・9～10行目）

釈文に直した尾前

致仕の大臣、あはれをもおり過ぐし給はぬ御心にて、

陽明本

おほきおと、も物、あはれをもおりすくし給はぬ御心にて（二〇オ・6～7）

読者の間では、頭中将という名で知られている作中人物を何と呼ぶか。太政大臣をしたことがあるのは事実であるが、夕霧が大将と呼ばれている（四行先。陽明本でも、大将と呼ばれている）ことから、御法巻の時点での呼び名「致仕の大臣」のほうが良いのではなからうか。

⑪尾州家本

中宮などもおほしわする、ときのまなくこひきこえ給（巻末）

釈文に直した尾前

中宮なども、思し忘るる時の間なく恋ひ聞こえ給ふ。

陽明本

中宮などもおほしわする、時のまなくひかすにそへてこひきこえ給（巻末）

人の死の悲しみは、次第に薄らいで行くものである。しかし、秋好中宮は、紫上のことを喪った悲しみが、いつまでも薄らかなかつたというのが、尾前の本文である。日が経つにつれて、次第に悲しみが強くなつて行つたという陽明本の本文は、あり得ない。

#### 第四節 夕霧巻

この巻については、第九十三丁裏以降が別筆のようなのであるが、一応、考察の対象に含めることにする。  
まず、長文誤脱が指摘されている。

誤写とか脱文の認定は困難だが、一応他本との関連などから処理してゆくと、前者は二十四回、後者は三例を数えることができる。

(1) なをえ思ひはかけす (二四ウ・6)

※おもひはるけす (二三三三4)

(2) 一夜はかりの御うらみふみをとらて所にかこちて (六二オ・5)

※とらへところに (一三四五12)

(3) あらくしうはものし給はねは (二三ウ・4)

※あらくしうはえひきかなくなるへくはたものし給はねは (二三二六7)

(4) 心つきな事とおほしさましつ、 (七八オ・8)

※心つきな事とおほしなからはつかしとおほさむいとおしきをなにかはわれさへき、あつかはむとおほしてなむ

(二三五四14)

(伊井春樹氏『源氏物語 十一 翻刻・解説』七九〜八〇頁。※印の本文に付された頁数行数は『源氏物語大成』校異篇のもの)

伊井氏は「誤写とか脱文の認定は困難」としているが、前後の文脈も考慮すると、傍線が付された部分を陽明本側が不注意で脱落させたものとしか考えようがない。

長文脱落は、更に以下のような例をも付け加えざるを得ない。

●大島本

(雲居雁)「一夜の御山風にあやまり給へるなやましきななりと、おかしきやうにかちきこえ給へかし」と聞きこえ給ふ。(夕霧)  
「いで、このひが事ことな常つねにの給そ。……」(新大系第四卷一一四頁一四行目～一一五頁二行目)

陽明本

ひとよの御山風はをかしきやうにかちきこへ給へかしときこへ給いてこのひか事なつねにの給そ……(四四オ・5～7)

雲居雁は、落葉宮とその母宮側への返事として、「山から吹く風に当たって、風邪を引いたのか、体調がすぐれない」と書きなさいとアドバイスしている。陽明本本文だと、山から吹く風が風流だったように書きなさい、というアドバイスだったということになってしまい、落葉宮の母側へのこの時の返事として、不適切である。

●大島本

大方かたの空そらにもよほされて、干ひる間まもなくおほし嘆なげき、命いのちさへ心こころにかなはずといとはしういみじうおほす。(同一二四頁二～三行目)

陽明本

おほかたのそらにさへもよをされていのちさへこゝろにかなはざりける御身いとくはしういみじうおほす(五八オ・4～8)  
空の様子に催されて、悲しみや嘆きが増す。陽明本だと、空の様子に催されての悲しみも嘆きも抜け落ちてゐる。袖が乾く間もない涙と、雨が降りそうな空の様子もつながっているのかもしれない。その意味でも大島本が良い。

●大島本

(朱雀院の落葉宮出家を戒める詞)「いとあるまじきことなり。げに、あまたとさまかうざまに身みをもてなし給べきことにもあら

ねど、後見なき人なむ、中くさるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世、後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。(同一三五頁三～六行目)

陽明本

いとあるましき事なりけり又とさまかうさまにみをもてなした、ふへきにならねとうしろみなき人の中くさるさまにてあるまじき名をた□ちつみえかましきときこの世ののちのよなかそらにみゆるときもあり(七七オ・4～七八ウ・1)

陽明本は「もどかしき咎負ふわざなる」を誤脱しており、そのため、朱雀院が娘を説得する言葉「この世の後の世」この世、の直後の「の」は衍字か、中空に見ゆる時もあり」は、はなはだ迫力に欠ける。

次に、もっと少ない字数の異同についてである。

まず、夕霧が小野に落葉宮を訪問するときのことである。

①大島本

八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもおかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ、(小野へ行く)(同九一頁一～二行目)

陽明本

八月廿日はかりなればのへのけしきもかしきころをひなるに山さとのありさまのいとゆかしかりければ(小野へ行く)(四オ・5～8)

新潮日本古典集成『源氏物語』<sup>21</sup>は、「八月中の十日ばかりなれば」を「八月中旬の頃なので」と訳している。日国大第二版<sup>22</sup>は、親見出し「なか」の中の小見出し「なかの十日(とおか)」で、

一か月を三〇日とし、それを三分したまん中の一〇日間。中旬。(略)補注中世以降、月の二〇日目をさすようになったといわれる。

と述べている。新大系が「八月中の十日ばかり」を「八月二十日ごろ」と訳し、新編日本古典文学全集（以下、新全集と略称することがある）が「八月中の十日ばかりなれば」を「八月の二十日ごろなので」と訳しているのは納得が行かない。新大系や新全集は、平安時代の作品から、「中の十日」が二十日の意味になる用例を挙げつつ日国大第二版を否定する、その上で右のような訳を施すべきではなからうか。平安時代の作品から用例を挙げると、やはり、中旬の意味になる。

かくて、八月中の十日のほどに、帝、花の宴したまふ。上達部、親王たち、残りなく参りたまひて遊びしたまふ。帝、「年の内、木草の盛り、秋のほどにいつか」と問はせたまふ。藏人の少将仲頼奏す、「野の盛りは八月中の十日、山の盛りは九日上の十日のほどになむ」

新全集『うつほ物語』は、「中の十日」に「中旬」「上の十日」は上旬、「下の十日」は下旬、の意」と施注している。従うべきだろう。桜の花の盛りでも、三、四日、若しくは、四、五日はある。野の盛りも山の盛りも、およそ十日間ぐらいはあつてしかるべきである。

陽明本本文は、「廿日はかり」であるが、二十日の月は、二一時を過ぎたころ東の空に姿を現し、翌日の午前何時かに南天、夜明けの時刻には少し西に傾いているだけである。西の山の稜線迄辿り着かない。この日の夕霧は、夜明けの少し前に落葉宮の邸宅を立ち去るが、立ち去る直前の自然描写は、

○大島本

月の山の端近き程、（同九八頁五行目）

陽明本

月やまのはちかきほと（一六〇・二〇三）

である。陽明本本文の非古態性は明らかである。大島本本文の「中の十日」は、その約十日間のうちの、一二日か一三日か一四日と考えれば、「山の端近き」と整合する。それならば、なぜ、紫式部は初めから、「八月十余日」と言わなかったのか。夕霧巻巻頭近くの「八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもおかしきころなるに」は、「吹上下」巻頭を踏まえたからであろう。

次の問題として、陽明本の「廿日はかり」という非古態の本文は、誤写に拠って生じたのか、改竄に拠って生じたのか。この巻頭近

くだけ見ていては、どちらであるのか断定をしにくい。しかし、

○大島本

入方の月（同九八頁五行目）

陽明本

廿日月（一六〇・二）

と一六丁表でも「廿日の月」のような異文が見えるから、巻頭近くも十六丁表も、どちらも、陽明本側が新たに作り上げた言葉なのだと思う。

次の異同箇所は、落葉宮が夕霧への返歌を書く場面である。巻末近くで、別筆の部分だが、一応、検討を加えることにする。

②大島本

涙のみつらきに先立つ心ちして、書きやり給はず。

なにゆへか世に数ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしとも聞く（同一五四頁一五行目～一五五頁二行目）

陽明本

なみたのみ水くきにさきたつ心地してかきやり給はず

なにゆへかよにかすならぬ身ひとつをあはれとも思ふつ「う」を消して「つ」と書く）らしともきく（一〇七ウ・三～七）

「水莖に先立つ」と「つらきに先立つ」の対立である。『源氏物語大成 校異篇』（底本は、梅枝巻、幻巻では大島本）に基づいている『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』<sup>24</sup>に拠れば、梅枝巻、幻巻にそれぞれ一例ずつ、計二例しかない。

○大島本

見給ふ人の涙さへ水莖に流れ添ふ心地して、「梅枝」。新大系第三卷一六四頁六～七行目）

（『源氏物語大成 校異篇』に拠れば、「水莖」と「流れ添ふ」について異文なし。別本の麦生本と阿里莫本が、青表紙本系大島本の「なみたさへ水くきに」に対し「御涙さへ此水くきに」という本文を持っているが、やはり、水莖に流れ添ふである点は、動かない）

○大島本

それとも見分かれぬまで降り落つる御涙の水茎に流れ添ふを、「幻」。新大系第四卷二〇四頁一四〜一五行目

陽明本

それとみえぬまでふりおつる御なみたのみつくきにそふを（二五ウ・五〜六）

これらの用例では、「流れ添ふ」という複合動詞（或いは、「添ふ」と言う動詞）に接続している。「先立つ」という複合動詞に接続している、夕霧巻の「水茎」は、陽明本側が勝手に付け加えたのではなからうか。

③大島本

虫の音も鹿の鳴く音も滝のをとも一つに乱れて、（新大系第四卷九八頁三〜四行目）

陽明本

むしもしかのなくねもたきのおともひとつにみたれて（一五ウ・七〜九）

ここは、音、鳴く音、音と連続した方がよいのではないか。

④大島本

（夕霧）「……かう世づかぬまで痴れぐしきうしろやすきなどもたぐひあらじとおぼえはべるを、（同九八頁六〜七行目）

陽明本

かうよつかぬまでしれくしきこゝろやすきなどはたくひあらしとおほえ侍を（一六オ・六〜九）

夕霧は、落葉宮に、自分は愚直な迄にあなたの気持ちに尊重する、だから、安心しなさい、と訴える。こうした場合に使われる形容詞は「後ろやすさ」である。

この他にも、数文字程度の異同箇所、陽明本側が大島本よりも劣っている場合は多くある。そして、陽明本が大島本と異なる本文を持つとき、意味不明になることが時々あるのが、陽明本夕霧巻の特色である。しかし、既に、改竄箇所として①を、別筆の丁の改竄箇所として②を挙げた。改竄がある場合、その巻の非古態性は明らかなので、これ以上の挙例は差し控えたい。

### 第三章 陽明本源氏物語玉鬘以後の物語世界

ついうっかりの誤写や、脱文だけならよいが、改竄がある以上、その伝本は信用できない。陽明本の玉鬘以後巻々の中で、古写の巻々を第二章で見えてきたが、螢の「かたへ」、夕霧の「八月二十日ごろ」、御法の一日出家を巡る記事、同じ巻の「かくても日数をだに過し給ふまじりける」など、随所に改竄が見られた。

もはや、大島本と比較して非古態性を持つことは明らかである。

青表紙本系大島本と陽明本とのあいだに有意本文同士の対立があるとき、原典遡求を目指す私の立場からは、陽明本は無視するにせず、ということになる。

では、果たして、陽明本にも、陽明本の豊饒な物語世界があるのだろうか。陽明本にも価値があるのだろうか。本章で考えてみたい。

#### 第一節 専門用語の転化

陽明本は、宗教関係の専門用語を始めとする、各方面の専門用語及び専門用語的な言葉を変えてしまいう傾向が看取される。書写者は、平安時代の常識に明るくないからこそ、陽明本『源氏物語』の本文のような本文を作り上げてしまった。

御法巻に「七僧の法服」という言葉が出て来たが、「五僧の法服」とも言わず「僧の法服」とも言わず「七僧の法服」と言うこと、そうしたことを、自らは鎌倉時代に活躍した人間でありながら、平安時代の常識に明るかった藤原定家は、知っていたようである。

#### 第二節 陽明本の価値

工藤重矩氏は、「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界」<sup>25</sup>の中で、青表紙本系大島本藤裏葉巻が圧倒的に国冬本藤裏葉に

勝ることを説く際、「どの写本も多かれ少なかれみな疵ついており、（四九頁下段一九行目）とも述べている。

大島本にも、一つの巻に数か所ずつ、小さな疵があるようである。

大島本夕霧巻には、

明け暮る、もおほし分かねど、月ごろ経ければ、九月になりぬ。（新大系第四卷二二三頁一四〜一五行目）

という本文がある。新大系は、下段で、「月ごろ経ければ、……」について、「何か月が経ったことだから、九月になってしまふ。御息所の逝去から数えると「月ごろ」は合わない。別本類に「ひころ」（＝日ごろ）とある。」と施注している。陽明本では、

あける、もおほしわかねとおのつからひころへにければなか月になりぬ（五七ウ・10〜五八オ・2）

である。「おのつから」はともかく、「ひころ」は魅力的な本文である。夕霧巻のこの箇所も、大島本を底本とする活字校注書は陽明本に基づいて校訂すべきではないか。

活字校注書は、鎌倉中期と見られている尾州家本古写の巻々のうちの合成の巻一〇については、尾前を、その一〇巻以外の巻々では、青表紙本系大島本を底本にすべきだと私は思うが、鎌倉中期と見られている陽明本古写の巻々を、校訂に用いるべきだとも思う。新大系など既存の活字校注書で大島本が底本になっていることなどを理由に、加藤昌嘉氏は、既に大島本を厳密に調査した新日本古典文学大系というテキストが世に供されているのであるから、新たに、大島本を底本にした『源氏物語』の校注書を作る必然性がない旨述べている。新たな校注書の底本としては、①大沢本、②保坂本、③周桂本を候補に挙げている（番号は引用者に拠る。但し、伝本に付されたルビは加藤氏自身に拠る）。そして、①、②、③及び大島本のうち、どれが原作者オリジナルに近いのか分からない、とか訴えている。<sup>26</sup>

しかし、②保坂本なら保坂本の、③周桂本という本なら周桂本の、「原作者オリジナルに近い」本文の具体的列挙が無いため、反対もできなければ賛成もできない。①大沢本については、伊井春樹氏に拠って、注目すべき本文が具体的に列挙されているが<sup>27</sup>賛成できない。二〇二〇年代、若しくは、二〇三〇年代に新たに作られる活字校注書は、大島本を基本的に底本とすべきだと思ふ。そして、陽明本を比較本にすることによって、また、一部の巻では尾前を底本にすることによって、新大系や新全集、全集と差異化を図ること

ができる。もっとも、二〇一〇年代に入ってから、日本の社会情勢を考えると、出版社に、長編文学作品の新たな校注書の出版を提案するのは差し控えるべきかもしれない。そうであるとしたら、現代の『源氏物語』研究者一人一人に、大島本や尾前を、陽明本古写の巻に基づき校訂することを提案したい。尾州家本古写の巻々のうちの合成の巻一〇については、尾前を引用テキストにし、文法的若しくは意味的にどうしても通じない箇所は、陽明本、青表紙本系大島本も参照しつつ校訂すべきであり、また、その一〇の巻以外の巻については、新大系か新全集、全集を引用テキストにし、文法的若しくは意味的にどうしても通じない箇所は、その旨断りつつ、陽明本に拠って校訂すべきである。

青表紙本系大島本を校訂する際、青表紙本系の中で大島本よりも下位に位置付けられた諸本を校訂に用いるべきではない。新全集は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（古代学協会所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。<sup>28</sup>

と言って、大島本の誤脱を他の青表紙諸本で校訂した箇所もある。これは、前拙稿「青表紙本系改訂の必要性」<sup>29</sup>で言うと、Aダツシユの位置にある本文を、Lや、M、Nの位置にある本文に基づき校訂するという方法で、望ましくない。新大系は、「底本【多くの巻で、大島本のことを言う】の本文を尊重し、手を加えないことを原則とする」<sup>30</sup>という方針である。若紫巻は、本拙稿のメインテーマである螢巻以後に属さないもので、あまり言及したくないのだが、例の、「人なくてつれづれなれば」<sup>31</sup>も、大島本底本の新大系で、校訂されてはいない。私も、若紫巻第5段落は、「人なくてつれづれなれば、……」という本文で読みたい。他の校注書の中には、大島本を底本としつつ、右の箇所を他の青表紙本に拠って校訂してしまっているものがあるのは残念である。

他の段落、他の巻で、どうしても大島本を校訂したいときには、陽明本を根拠にして校訂すべきである<sup>32</sup>。では、陽明本補写の巻々は、大島本及び尾州家本見せ消し補入前本文の比校本としての資格はあるかどうか。まず、壬類の藤袴については、江戸時代の補写と見られているので、論外である。

乙類、丁類、己類について、第一卷『翻刻・解説篇』八〇頁以降の一覧表で青と記されている巻々は、前述の場合と同じ理由で、大島本校訂用本文の候補から外すべきである。

丁類の梅枝については、吉岡曠氏が、翻刻・解説篇で、改竄本であることを明らかにしている（以上、類の名称は、阿部秋生氏に拠る。注目の書に記されている）。その例のうち、「はむさ／わさ」の異同については、仮名遣いの違いは、本文の良否の判断材料にすべきではないこと、撥音の表記無表記も、やはり、判断材料にすべきではないことから、私の判断としては、改竄本である根拠から外したい。しかし、外してもなお、他に根拠がたくさんある。改竄本であることは動かない。それと、補写の巻であることを併せ考えて、大島本の比較本の候補から外すことにしたい。

## 注

- 1 武蔵野書院、二〇〇八年。
- 2 『源氏研究』第六号、二〇〇一年四月。
- 3 拙稿「御伽草子『接待』全訳注（上）」。「富山大学人文学部紀要」第五三号、二〇一〇年九月。拙稿「御伽草子『接待』全訳注（下）」。「富山大学人文学部紀要」第五四号、二〇一一年三月。
- 4 「義経記」巻七の改竄統紹。「富山大学人文学部紀要」第六七号、二〇一七年八月。
- 5 佐藤陸氏「永享の乱」「結城合戦」の叙述。「古典遺産」第六三三号、二〇一四年三月。三頁上段二行目から下段二行目で佐藤氏が明らかにしているように、「兵庫頭方」という同語の反復が原因で、『足利持氏滅亡記』は、約十字欠落している。このため、『足利持氏滅亡記』は文学性が劣ることになった。
- 6 「若紫巻の本文」。「中古文学」第四八号、一九九一年一月。
- 7 「古典遺産」第七〇号、二〇二一年六月。
- 8 「本文研究と大島本に対する15の疑問」。中古文学会関西部会『大島本源氏物語の再検討』（和泉書院、二〇〇九年）所収。
- 9 吉岡曠氏『源氏物語の本文批判』（笠間書院、一九九四年）六四頁。その他。
- 10 伊井春樹氏等編『源氏物語別本集成』第一卷（桜楓社、一九八八年）の刊行された年。
- 11 『陽明叢書国書篇』第十六輯『源氏物語』（思文閣出版、一九七九年）。ここでは、その第一卷「翻刻・解説篇」。

- 注9参照。
- 12 「源氏物語宿木前半評釈(2)」。『富山大学文学部紀要』第六六号、二〇一七年二月。
- 13 『中古文学』第九二号。二〇一三年十一月。
- 14 拙稿「源氏物語総角前半評釈(1)」。『富山大学文学部紀要』第五八号、二〇一三年二月。注15に同じ。
- 15 「源氏物語宿木後半評釈(2)」。『富山大学文学部紀要』第七五号、二〇二二年八月。
- 16 「月やあらぬ」の解釈。『中古文学』第三七号、一九八六年六月。
- 17 「源氏随致」。晃文社、昭和一七年。
- 18 一九九四年。
- 19 夕霧卷を含む第六巻は、一九八二年。
- 20 『日本国語大辞典 第二版』(全一三巻)。小学館、二〇〇〇年—二〇〇二年。
- 21 一九九九年。
- 22 上田英代氏・村上征勝氏・今西祐一郎氏・樺島忠夫氏・上田裕一氏。勉誠社、一九九四年。所収は、注14参照。
- 23 『揺れ動く』源氏物語』(勉誠出版、二〇一一年)一四一—一四二頁。
- 24 『幻の大澤本源氏物語』『百舌鳥国文』第二〇号、二〇〇九年六月。「大沢本源氏物語の性格」『中古文学』、二〇〇九年六月。「源氏物語のことばと物語の展開」『日本語学』二九巻一号、二〇一〇年。「浮舟の入水事件」『むらさき』四七、二〇一〇年。凡例。
- 25 『富山大学文学部紀要』第二五号、一九九六年六月。
- 26 凡例。隅付きパーレン括弧内は、引用者に拠る補足説明。
- 27 新大系第一巻第五段落。この本文に言及した論文は、新大系附録室伏信助氏「大島本『源氏物語』採択の方法と意義」ほか、幾つかある。
- 28 但し、若紫については、二〇一九年一〇月、新出定家本の発見が公表された。第一三三丁裏の最終部分に拠り、「定家本系諸本全体の粗本ではない」ことが確認された(新美哲彦氏「新出「若紫」巻の本文と巻末付載「奥入」」。『中古文学』第一〇六号、二〇二二年一月)が、私は、「人なくつれくなれは」という本文を持っている(7オ5行目。八木書店の複製本に拠る)ため、青表紙本系の他の伝本よりも上位に位置づけられると考えている。この巻については、大島本を比較する伝本として、この新出定家本を使用した方がいいのではないか。新出「定家本」は、二〇一九年一〇月の紹介のされ方に問題があったが、二〇二〇年に、八木書店より、複製が刊行されている。